

Title	作家・大城立裕の立場決定：「文学場」の社会学の視点から
Sub Title	Sociological analysis of position-taking in the literary field : A case of Oshiro Tatsuhiro
Author	松下, 優一(Matsushita, Yuichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2011
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.16 (2011. 7) ,p.104- 117
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20110709-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

作家・大城立裕の立場決定

—「文学場」の社会学の視点から—

Sociological Analysis of Position-taking in the literary field:
A case of Oshiro Tatsuhiko

松下 優一

1. はじめに

この論考の主題となるのは、作家・大城立裕の文学的立場決定がいかなる規定力に媒介されていたのか、という問いである。本稿は、具体的な作家の文学実践に即し、P・ブルデューが提示した文学社会学の視座を援用しながら、その作品生産を方向づける社会的要因を把握・記述していこうとする試みのひとつとしてある¹⁾。

ここで取り上げる大城立裕は、半世紀以上にわたり沖縄を舞台とし、そこに暮らす人々を描く小説を書き続けている作家である。1925年に沖縄県中城村に生まれた大城は、上海東亜同文書院の学生として終戦を迎え、戦後、高校教師や琉球政府職員などに携わる傍ら創作活動を始めた。1967年に小説「カクテル・パーティー」によって芥川賞受賞。戯曲や評論・エッセイなどの分野でも数多くの著作がある。

この作家の文学的営みは「大城立裕の文学と思想を通して、沖縄（人）の戦後体験の幾つの特徴的な諸側面に光をあて、その意義について今日の地点からあらためて考察し、再審してみる」（波平 2001：128）といった形で、沖縄の戦後体験を考えるための素材を提供するものとして扱われることがある。たしかに、その創作のモチーフは、芥川賞受賞の際の「受賞のことば」のなかで「ゆっくり落ち着いて、沖縄というやつ（つまり私）を書いていきたい」（大城 1982：427）と述べるように、自己存在と重ねあわせられた“沖縄を書くこと”にあった、といえる。しかしながら、本浜秀彦が指摘するように「大城の自らを『沖縄』と捉える身体的な感覚」、「『私』を『沖縄』に同一化させるその意識」は、必ずしも自明なものではない（本浜 2000：203）。また、この作家が一貫して“沖縄を書くこと”に軸足を置いていたのは確かだとしても、その意味するところは歴史的に変化を見せてもいる。1996年のシンポジウムの席で大城は自己の文学を次のように振り返っている。「私は私小説を書きません。他人はそれを不思議に思うようですが、私にとって沖縄の歴史や民俗を書くことが私小説に相当していると思います」（沖縄文学フォーラム実行委員会 1997：68）。「沖縄を書くこと」と「沖縄の歴史や民俗を書くこと」のあいだにある位相の違い。本稿が目しようとするのはこの点である。

以下、この作家が志向する文学のかたちとその由来、それに対する先行研究を整理する。その上で「文学場」論の視座を確認し、その観点から作家の掲げる文学理念がいかなる要求に応

えるものとしてあったのかを考察する²⁾。

2. 大城立裕の文学理念

(1) 沖縄の「神話世界」を発掘すること

特に1972年の沖縄“復帰”以降、この作家の創作課題は、沖縄の文化（歴史や民俗や生活）を掘り下げることにより、その深層にある文化的本質（「神話」）を発見し、それを作品化することによって普遍的な価値をもつ文学を生み出すこと、としてたびたび表明されている。

戦争でも歴史でも現代の生活でも、そのなかに沖縄の神話世界を発見して書くことがいまいちばん大事なことではないかと思われます。それは、海や共同体や女性文化や祭祀的世界など、いろいろとユニークなものがあるはずで、いくたりかの作家や劇作家、詩人らが試みています。（大城1984：13）

「海」「共同体」「女性文化」「祭祀的世界」といった「ユニークなもの」の中に「沖縄の神話世界」を「発見」すること。これが文学性獲得のための基準に据えられるのである。作家がこうした文学理念を立ち上げる背景には、自身認めるように、高校教師時代の教え子でアイルランド文学研究者・米須興文による小説「亀甲墓」³⁾への批評がある。米須は、亀甲墓（女陰を象るとされる）に象徴化された「沖縄人の生死観」を「神話批評」の観点から評価した。曰く、「作者は、沖縄文化の深層に鋭く切り込んでおり、そのようにしてとらえられた沖縄文化の神話的な構造を、戦争という激烈な営みの中で見事に表層化してみせた。沖縄の土着文学が、今日的な普遍性をもつ一つの可能性を、この作品は示しているといえる」（米須1991：220）。さらに米須は、「沖縄文化の神話的構造」の表出こそが沖縄文学の「今日的な普遍性」獲得の道筋であると示唆している。なお、ここで言われる「神話」とは「文化集団の宇宙観、生命観」「文化集団の生き方を決定づける信条」、「人間の芸術的・創造的衝動」が汲み出される「深層」を意味する文化人類学由来の概念とされる⁴⁾。

さて、私たちにとって興味深いのは、このような特定作品に対する批評が、作家の創作理念に転化されるという事実それ自体である。たとえば大城が沖縄文化論を展開した『内なる沖縄』（1972）には、次のような言及が見られる。

「ころろ」が「かたち」にあらわれ、その「かたち」を通して「ころろ」を探り、それによって未来の「かたち」を予言し、創造する—これが文化発展の論理であるべきだろう。この探りとあらわれを私なりに解明したい欲望にかられるが、ときに文学的認識として創作にはたらくことはあるようで、「亀甲墓」（創作集『カクテル・パーティー』所収）にその例を見る、と米須興文氏は指摘している。つまり、この作品には沖縄人の生死観があらわれているとし、死体を葬ることと情事とのオブジェクティブ・コリラティブを認めたり

するのだが、これらのことは、日常生活の中で意識的に認識されるものではなく、たまたま創作心理において潜在認識が現れてきたものにすぎない。作者としても論理を意識していたわけではないから、文学以外の表現はおそらく不可能であつたろう (括弧内原文、大城 1972 : 156)

ここで確認されるように作家は執筆時に、「沖縄人の生死観」を描くことをモチーフに据えていたわけではない。この点に作品の価値が認識されるには、米須の評価の介在がある。しかし「潜在認識」にすぎなかったこのような作品の価値は、やがて「意識的」に創作の基軸に据えられ、「亀甲墓」は沖縄の文化的基層 (神話) を発掘したがゆえに「普遍性」を持ちえた作品として繰り返し言及されることになる。それは 90 年代に至るまで変わらない。1996 年の国際シンポジウム「沖縄文学フォーラム」の基調報告でも次のような発言がみられる。

「亀甲墓」は評価されるようにはなりましたが、「二十日夜」に触れる人はいませんでした。「亀甲墓」が沖縄の生死観の神話を発掘したものだとなれば、「二十日夜」は永生願望、つまり長く生きたいという願望の神話を私自身で発掘したつもりです。沖縄の生活風俗を書いても歴史や民俗の絵解きに止まっている限り普遍性を持たないと思います。神話的なものを発掘したら普遍性を持つのだと思いますが、それは書く側の技量と読む側の理解力が合体した時にこそ有効だと思います (沖縄文学フォーラム実行委員会 1997 : 68)

「二十日夜」は 1984 年発表の短編であるが、ここでの言に従うなら「普遍性」につながる「神話」を「発掘」することが文学的理念に据えられ、これをモチーフとして書かれた作品ということになる。文学作品は「神話的なものを発掘する」ことにより、「普遍性」を獲得する。文化的背景が異なる読者であれ、理解される可能性を持つ。70 年代以降の大城の文芸時評やエッセイを紐解けば、こうした文学生産の理念の表明にたびたび出会すことになる。

民俗文化的な素材のなかに沖縄の「神話」を「発掘」し作品化すること。そのように表明される作家・大城立裕の文学理念は、作品『亀甲墓』に対する「神話」を軸とする米須興文の批評を自らの創作理念に転化するところに生まれている、といえる。とはいえ批評家が用意する作品解釈の枠組みを作家自ら創作理念に転用し、長きに渡って表明し続けるというのは、必ずしも自明な展開であるとは思われない。その文学理念が「神話批評」という一種の文化理論に基づくものである以上、それが伴う認識枠組みは逆に文学のかたちを制限する (創作の自由度を狭める) ともいえる。少なくともこの作家は、批評家の言説に素朴に寄りかかりすぎている、という印象は否めない。では批評家による作品評価のための概念が、作家自らの創作理念に転化される、という文学的事象はどのような条件下で生じたのだろうか。

(2) 先行研究

ここで対象化しようとする作家の文学理念については、まず鹿野政直による大城立裕の評伝の中に言及がある(鹿野 1987)。それによれば、米須の提示した神話概念は「大城にとって一つの啓示として受け取られたことであろう。沖縄を“掘る”という、彼の立ち向かおうとする主題を、一語に集約し象徴していたからである」(鹿野 1987: 436)。沖縄返還が政治課題となっていた 1960 年代後半の時期、大城は「復帰」を沖縄の独自性・主体性を確立する機会と捉え、「沖縄問題は文化問題である」との持論を展開していた⁵⁾。「復帰に向かってなだれこむ一九六〇年代末から七〇年代初めにかけての時期(中略)深く沖縄とはなにかの主題を掘りさげてゆくこととなる。まさにそれでもって沖縄が自立してゆくべき文化の核とはなにかの課題が、彼を捉えずにはいなかった」(鹿野 1987: 436)。鹿野の見解に従えば、米須の神話概念は、沖縄をめぐる状況に向き合うなかで生み出された大城の関心事を言語化するもの、あるいは明確な輪郭を与えるものであったといえる。

大城と米須の関係に注目した論考としては他に、我部聖による米須興文の批評言説自体の検討がある。我部は鹿野の論を「大城が米須の言説をどのように受けとめたのかに焦点が当てられていて、米須が大城立裕をめぐる言説にどのように関わったのか、また互いの言説が交錯することでテキストにどう影響を与えるのかについて、具体的な分析は行われていない」(我部 2004: 97)と評し、「単に師弟関係や作家と研究者という関係で捉えるのではなく、被植民地の男たちによる共犯関係として読み直さなくてはならない」(我部 2004: 111)とする。その上で『亀甲墓』に施されたテキスト改変(1976年『土とふるさとの文学全集』収録時における登場人物の老女の描写＝「腰を抜かすというユーモラスな場面から、墓の礎石をしっかりとつかんで踏ん張る力強さをアピールする場面」への書き換え)が、沖縄の精神文化の支柱たる老女像を重視する米須の働きかけによるものであり、沖縄の文化的本質を「女性文化」に据えようとする米須と大城のまなざしの共有それ自体を文化表象の政治性という観点から読み解いている⁶⁾。

ひとまず以上が、大城と米須の関係に関する直接の先行研究ということになるが、後者は批評言説(沖縄に対する読解コードとしての「神話性」「女性文化」)の政治的意味や効果を主題としているため、米須の批評を受容する作家大城の側の事情はそれ以上追究の対象となっていない。他方、前者は沖縄の主体性確立への模索の産物として大城文学を読み、沖縄の知識人としての大城の思想的営為と作家としての大城の文学的営為とのあいだに区別を設けていないように見える。「大城立裕の思想的行程が示すものはなにか。それは沖縄のどのような位相をあらわしているか。彼の作品をたどることにより、ここではそれを考えることとしたい」(鹿野 1987: 266)というような問いの立て方においてそれは明らかだろう。

さて、ここで私たちが析出したいのは、鹿野が指摘する文脈とは密接に関連しつつも分析的には区別されるべき文学に固有の領域において、この作家が直面していた課題である。それは文学研究の領域においてはことさら検討対象にならないほど自明な事柄なのかもしれないが、

やはり「批評家」米須の読みを引き受け、「神話」の作品化を生産理念に据えるという作家の道行きを駆動していた重要な条件であったように思われるのである。

3. 文学場の社会学

P・ブルデューが提示した文学場の社会学 (Bourdieu 1992) は、文学 (的事象) を理解するにあたり、それをそれ固有の (場) の構造に呼応するものとして分節化し、社会学的説明の対象に据えるというスタンスを取るものである。ゆえに先に示したような本稿の課題にとっては無視し得ない参照枠組みを提供するものであるといえる。

古典的なマルクス主義的文学社会学が、文学的生産物を階級に代表されるような社会的現実の「反映」とみなし社会状況に直接結びつけるのに対して、ブルデューは文学固有の論理をそれ自体対象化するような社会学的視座を設定しようとする。文学的立場や方法論は、作家個人が身をおく社会の歴史的状況というより、作家が「作家」として参入する「界 champ」、「文学」というイリュージョン (*illusio*) が共有される社会圏域 («文学場 champ littéraire») の構造によって規定されると考えるのである。近代以後の文学生産・流通・消費は、文学雑誌や固有の制度的審級 (文学賞など) の整備により、それ自体ひとつの界として他の社会圏域から相対的に自律する。自律した文学の領域は、その他の社会圏域と同様、遵守されるべき一定の価値基準が設定され、個々人・諸集団が文学的資源を利用しながら「卓越化 distinction」を図り、ヘゲモニー争いを繰り広げるひとつの場として把えることが可能となる。こうした視角に従えば、作家は「文学場」に参入し、その「場」の構造 («可能態の空間 *espace des possibles*») との交渉のなかで自らの位置取りを選択 («立場決定 *la prise de position*») しながら、作品を生み出すものと考えられる。したがって作家の文学生産の企図は、作家個人の精神ないしは社会的背景に還元されるものではなく、文学生産の場の構造 (作家が主観的に認知する場の構造) と作家がその場のなかで占める位置から戦略的に生成される、ということになる。『芸術の規則』において具体的に分析されているのは、フランス文学場におけるフローベールの立場決定であるが、これを把握するためには「芸術的企図がそれとの関係において構成されてきた現実的な、あるいは潜在的な芸術的立場決定の空間を、再構成しなければならない」 (Bourdieu 1992=1995 : 143-144) と、ブルデューは主張する。

私たちが彼を「先駆者」として扱うことで暗黙のうちにイメージしている人物としての彼は、すでに一定の仕事を行なっており、それによって芸術の世界は変貌させられてしまったわけだが、それ以前の芸術世界において若いフローベールがなさねばならなかったこと、なそうとしたことを、まだフローベールになっていない段階のフローベールの視点に立って見出そうと努めるのでなければ、彼の事業の独創性は明らかにはならない (Bourdieu 1992=1995 : 160)

フローベールの視点を再構成することとは、文学生産の企図がそれとの関係で生成されるところの文学場の状況（可能態の空間）を把握することに他ならない。これにより「凡庸なものを巧みに書くこと」というフローベールの立場は、一方でゴーチエのような純粹芸術主義からの、他方で社会的現実コミットする写実主義からの「二重の絶縁」によって卓越化を図るものとして捉えられ、当時の文学場の構造（「可能態の空間」）に規定されていたことが示される。

このような文学的実践の把握の仕方に依拠するならば、大城立裕による沖縄の「神話」を「発掘」し作品化するという文学理念の表明は、ひとつの「立場決定」として捉えうる。つまり、「場」の構造の中での位置取りの問題として考えられる。彼の文学的な立場決定が呼び込まれる場の構造は、その文学理念が設定される際の作家の視点を再構成する作業を通じて明らかとなるはずである。それによって作家に対する批評言説の影響という捉え方や文学的事象を社会状況に直接結びつける捉え方からでは見えてこない文学の場に固有の規定力を把握することができるように思われる。ただし、この作家の文学理念を分析しようとする場合、東京を中心とする中央文壇と、沖縄内部の文壇を分析的に区別しておく必要がある（松島ほか 2000）。ひとまず前者を〈日本文学場〉、後者を〈沖縄文学場〉と呼ぶとするなら、沖縄で文学生産を行う作家は、この二つの場に二重に帰属することになる。場の二重性において、70年代以降の作家大城立裕の立場決定は考慮されなければならない。以下では、1950年代「琉大文学論争」で明確化された〈沖縄文学場〉における位置取り、ならびに1967年の芥川賞受賞以後本格的に組み込まれた〈日本文学場〉における位置取りをみていくことにする⁷⁾。

4. 大城立裕の立場決定と、それを促した文学場の構造

(1) 琉大文学論争

大城の初期の創作姿勢に大きな転換点を印しづけているのは、1950年代に詩人新川明らと戦わされた「琉大文学論争」である。『琉大文学』とは、琉球大学文芸部の学生たちが主体となり、1953年から不定期発行された文芸誌である。「琉大文学論争」とは、この『琉大文学』紙上で、新川明・川満信一らが沖縄の政治的現実を告発する「社会主義リアリズム」を掲げ、当時私小説的な作品を書いていた大城立裕らの没政治的な“沖縄文学”を批判したことに端を発する論争である。1950年代初期、朝鮮戦争を背景に基地強化がはじまり、強制的な土地収用、住民側の抵抗運動（「島ぐるみ闘争」）と展開されるなかで、新川らは政治社会的状況に積極的にコミットする抵抗文学を主張する。その批判に対し大城は、彼らが標榜する「社会主義リアリズム」を「既成の文学理論を、未熟な受け入れ態勢でうけとった」もので、「主体的なもの」ではない、政治的主張に対して実作が伴っていないと批判し、沖縄を描く文学の価値が状況告発性のみに還元されてしまうことに反対した。この大城の反論に対し、新川は「芸術至上主義」だとして再批判している⁸⁾。文学場論の観点からこの論争を記述した加藤宏によれば、この新川—大城間の論争は、書かれるべき「沖縄文学」の定義をめぐるなされたものであり、〈沖縄文学場〉における文学的正統性の承認をかけた闘争、「社会主義リアリズム」vs「芸術至上主義」として

〈沖縄文学場〉を構造化する契機として捉えることができる (加藤 2004、2006)。

ところで『新沖縄文学』第 3 号 (1966) の寄稿において大城は「私小説的な発想の姿勢、そこからくる小説作法の弱さを勉強して補うようにしむけてくれたのは、『琉大文学』の新川明君たちであった」(大城 1966 : 162) と述べ、「私小説」的な初期創作から自らの創作姿勢を反省的に問い直すのに『琉大文学』での論争が大きな契機になったことを認めている。もともと大城に確たる「文学」像はなかったとするなら、この文学論争は、大城が書くべき「文学」の方向性を定め、文学的立場を確立していく際の参照点として位置づけられる。しかしここで注意すべきは、この時点で 70 年代以降に見られる沖縄の民俗文化的なモチーフが前面化しているわけではない、ということである。

沖縄の素性、沖縄的なるものへの関心が、戯曲「山がひらける頃」(本誌創刊号)、「亀甲墓」(前号) などとなり、沖縄の現実への関心が「逆光のなかで」「カクテル・パーティー」となる。これらが、異質の文体にみえながら、私のなかではやはり結びついているつもりなのである。これらのどれにも、琉大文学の影響はやはり大きいというべきであろう。(傍点括弧内原文、大城 1966 : 163)

ここでの作家の言葉にしたがえば「亀甲墓」も「カクテル・パーティー」も「沖縄を書く」という大きなモチーフの中で生み出されたものだったということになる。「カクテル・パーティー」(初出『新沖縄文学』4 号) は、米軍キャンプ内で開かれるパーティーでの会話を中心とする前半部と、娘を米軍兵士にレイプされたことを知った主人公が周囲の反対を押し切り犯人を告発するまでの心の揺れを二人称で語る後半部から構成される作品であり、前半と後半で主人公の置かれた状況が劇的に変化し、そのコントラストが計算された文体で浮き彫りにされる現代の不条理劇である。「亀甲墓」のような「沖縄的なるものへの関心」と、「カクテル・パーティー」のような「沖縄の現実への関心」は、同じコインの裏表であった。ところが、この作家の「沖縄を書く」というモチーフは、米須興文の批評を受けて「沖縄の神話」を書くというモチーフ(「沖縄的なるものへの関心」)へと収斂されていくことになる。

(2) 「カクテル・パーティー」の芥川賞受賞と政治的読解コード

1960 年代の沖縄では、戦争被害、基地被害、検閲等の「特異な環境」ゆえに、沖縄で文学に携わる人々の間に「沖縄は文学不毛の地である」という意識が存在していた。1966 年に沖縄タイムス社が文学振興のために創刊した雑誌『新沖縄文学』は、その創刊号において「沖縄は文学不毛の地か」という題の「紙上座談会」を掲載している。

こうした状況認識が共有されていた当時の沖縄において、大城の芥川賞受賞は大きな事件として受けとめられることになる。当時の『琉球新報』(1967 年 7 月 22 日付) は、この出来事

を一面トップで報じ、「沖縄は文学不毛の地ではない」と題する座談会（参加者は安次嶺栄一、伊礼孝、大城立裕）を組んでいる（5面）。この座談会記事には「大城氏がみごと立証／“土着文学”に大きな自信」、「貴重な跳躍台設定／中央文壇への突破口に」といった見出しが付されており、「ユニバーサルな問題が『カクテルパーティー』では、沖縄の今日的状況とふれながらでている」（安次嶺）、「『カクテルパーティー』はユニバーサルにつきる。沖縄という閉鎖性が感じられない」（伊礼）と、この作品が持ちえた「普遍性」に対する賛辞が送られている。「芥川賞」については「日本では最も権威ある文学賞となっている」（8面）と紹介されているが、いうまでもなくこの文学賞は日本現代文学の文学的聖別・制度的な正統性認定の装置であり、作家にとっては自己の文学的正統性を保証する象徴資本として機能する。この作家は〈日本文学場〉においてその文学性を承認されると同時に、〈沖縄文学場〉においては卓越化を図る資本を手にしたことになる。

ところで〈日本文学場〉において、沖縄の芥川賞作家として大城に期待されたのは、「沖縄問題」として当時日本のジャーナリズムが関心を寄せていた基地問題、アメリカとの関係など沖縄の政治社会状況を告発する作家という役割だったようだ。つまり、芥川賞を契機に大城は政治的問題を扱う作家、そして政治的問題の渦中にある「沖縄」の「真相」を伝えていく伝達者としての位置に置かれたようなのである。大城が芥川賞を受賞した1967年は、折しも沖縄の返還が日本の政治的焦点となっていた時期である。本浜（2000）は芥川賞選評の分析を通じ選者たちに政治的な読解コードが共有されていたことを指摘し、鹿野も「状況を後追いかちで、その文学界は、基地沖縄をなまなましく示した作品を手がかりとして、その地の文学界に手をさしのべた」（鹿野 1987：265）と、芥川賞授与（文学的な「普遍性」認定）の契機に「沖縄問題」への関心に関与したことを示唆する。それゆえの受賞だったのかどうかはともかく、芥川賞を契機にこの時期大城は沖縄を代表する知識人として本土のメディアから大量の状況論的エッセイの注文を受けることになる⁹⁾。例えば当時、岩波書店の月刊誌『世界』（1971年6月号）では『復帰』を問う」という特集が生まれ、大田昌秀の「沖縄の転機」、大江健三郎の「復帰拒否者を想像せよ」に挟まって、大城の「“挫折”を憂える」という文章が掲載されている。編集部による「読者へ」と題された巻頭言には、この時期の岩波側の問題関心のありかが伺える。

戦後二十五年にわたってアメリカの軍事占領地域となっている沖縄にあっては、(中略)日本国憲法の適用も受けず、政治的自由をはじめ、さまざまな人権も保障されず、また、日本国民としての国籍ももってはいない。このような無憲法・無権利状態に対決して、多年にわたりこれと闘ってきた沖縄の民衆は、『平和憲法』下に入ることを熱望して復帰運動を行ってきた。その人々につきつけられている『復帰』の実態が、あくまでアメリカのアジア戦略を是認し、日本国憲法の“形骸化”を一層深める方向のものであってよいのだろうか。(10)

このように『世界』編集部が問題化するのには、米軍駐留解消を伴わない沖縄「復帰」による「日本国憲法の形骸化」をどう受止めるか、ということである。ゆえに「軍事占領」「憲法 9 条」「反戦・平和」といった読解コードが全面に押し出される。そうしたコードに合わせて「沖縄」は読まれており、当時の沖縄知識人に対しては軍事占領の沖縄の現実を伝えていくという役割、憲法 9 条が遂行されていない日本の現状批判者としての役割、さらにベトナム戦争等アメリカがアジアで行う戦争の批判者としての役割を期待されていたことが伺えよう。芥川賞受賞によって大城は「現地」から「沖縄」を「本土」に対して発信していくという役割を割り振られ、「日本」に対する「沖縄」を意識せざるをえない立場に立つことになった（大城の初の単行本エッセイ集のタイトルは『現地からの報告・沖縄』である）。鹿野はこれを「現地意識」と概念化し、そこに「あることが進行しつつある現場にいるという意識」「みずからの観察がもっとも真相に迫っているという意識」「対本土ないし対東京への緊張感」の結合をみている（鹿野 1987 : 381）。

芥川賞受賞後の大城は、政治状況論的なコードでしか自らの作品が読まれず、必ずしも政治的状况に結び付かないテーマを扱う作品が切り捨てられることに対して危惧を示すようになる。受賞直後の大江健三郎との対談では「本土の一般読者のあいだで、これから先、文学性がいつのまにか抹消されてしまって、政治的な効果の側面からだけ云々されるようになると困るような気がしますね」（大城・大江 1967 : 154）と述べられ、アメリカやそれに関わる政治的関心からのみ自己の文学が読まれること、それ以外の「文学性」が抹消されることへの危機感が表明されている。しかし、その後も状況は変わらなかったようだ。

“沖縄”となればどうしてこういう状況論的な作品ばかりを採りあげるのだろう。石野径一郎『ひめゆりの塔』、霜多正次『沖縄島』などはこの作家たちの代表作だからそれでよいとしても、私の場合は『カクテル・パーティー』と『小説・琉球処分』ぐらいにとどまる。それがみな、沖縄の被害者としての状況を描いた問題小説というとらえかたになっている。いわゆる問題意識にのらない作品が切りすてられる。（大城 1975=2002 : 360）

沖縄の文学が取り上げられるとき、政治状況論的なコードでしか読まれない。そのように自己の「文学」が置かれた状況を受け止めているのである。日本文壇における位置については、当時のことを「文壇の思惑にこだわって、受賞第一作に基地もの（『ショーリーの脱出』）を書いた」（大城 1990 : 12）という自嘲気味な述懐からも伺えよう。

（3）文学的立場の矛盾

以上『琉大文学』論争における大城の立場、そして芥川賞受賞を契機に本格的に参入した中央文壇（〈日本文学場〉）で大城に期待された位置について確認してきた。この二つの契機のみを取り出し結論を下すのは性急と言わざるをえないが、米須興文の批評言説が作家の文学理念

として呼び込まれるにあたって、作家の置かれていた状況の一端を捉えることができるように思われる。

まず 1950 年代の〈沖縄文学場〉における論争（「琉大文学論争」）において、新川明の批判を受けて、彼が主導する社会状況を告発する文学に対し、大城は文学的自律性を目指す立場を取る。政治的ラディカルさを要求する「社会主義リアリズム」とは別様な文学性を確保しようとしている。つまりその時点で「基地問題」にコミットする抵抗の文学からは距離を置くという立場を示し、文学と政治的状況を切り離していこうとする姿勢を示してはいた。但し、その後も「沖縄の現実への関心」を携え、「カクテル・パーティー」のような政治的葛藤をテーマ化した作品を書いている。

その「カクテル・パーティー」により大城は 1967 年の芥川賞を獲得する。ここで文学的「普遍性」「正統性」の承認対象となったのは、自らがかつて距離を置いたはずの政治的メッセージ性を前面に出した作品であった。さらに〈日本文学場〉において大城に与えられたのは、新川明に対峙するかたちで表明された〈沖縄文学場〉における自己の位置取りと矛盾をきたすような位置であった。つまり、大城にとって自らの文学的正統性を保証するはずの「芥川賞」受賞は、皮肉なことにかつての論争における対立的立場を承認し、引き受けざるを得ないというジレンマを抱え込む契機となっているのだ。

ひとりの作家が参入する二つの文学場における位置の矛盾。〈日本文学場〉で期待されている位置を引き受けてしまえば、〈沖縄文学場〉における論争相手の立場を肯定することになり、自己の文学的立場に一貫性が保てなくなる。この時点で大城は、あらためて文学的正統性をめぐる問題に直面し、立場決定を迫られていたといえる。これは文学生産の場における行為体としての“危機”である。これを打開するのに必要とされるのは、状況告発型の文学から距離を取りつつ、なお 2 つの文学場において同時に「普遍性」「正統性」を主張しうるような、卓越したロジックであろう。それを提供するものとして、米須興文による「亀甲墓」への批評言説、沖縄的民俗文化の「深層」に「普遍性」をもった神話的象徴を見つけ出し作品化するという文学理念は、召還されるのではないだろうか。この理念を引き受ければ、社会主義リアリズムのような政治的状況を書く文学からは絶縁しつつ、なお沖縄の「真相」（「深層」）を書くという正統性を維持することができる。したがって、米須の「神話」論を自らの文学理念に転化し、自作「亀甲墓」に対する度重なる自己言及とともにそれが確認され続けられなければならなかった重要な契機は、2 つの文学場への同時参入と作家の文学的立場に生み出された矛盾、そしてこれを打開し卓越的なポジションを確保しようとする文学場の行為体の身振りに見いださう。ひとまず、これが本稿の結論となる。

こうしてみるならば、作家の文学的立場に生じた矛盾を解消するという意味合いを孕むがゆえに、民俗文化的な世界を描きなおかつ「普遍性」を確保しうる作品＝「亀甲墓」は重視されねばならなかったということになる。これに伴う代償が、大城の“沖縄を書く”文学において不可分だったはずの「沖縄的なるものへの関心」と「沖縄の現実への関心」の分離、すなわち

「政治」性に接続される後者の後景化／前者の「普遍」的な文学性の前景化だった、といえる。そこで生じたのは、文学なるものの価値の序列化に他ならない。「カクテル・パーティー」にも「普遍性 (ユニバーサリティ)」が認められていたにもかかわらず、その「普遍性」を作家はもはや顧みない。

『カクテル・パーティー』より『亀甲墓』のほうが文学としての価値がたかいと、私自身もかねてから考えていたし、現地の大方の読者のあいだでもそのようである。本土では思いもよらぬことであるらしい。私がこのことを試練だという意味は、たとえば私の作品にたいする中央での評価が低くばあいに、ほんとうに技倆の不足によるものであるのか、『亀甲墓』のように、むこうがオキナワを知らないことによるものか、判然としない、ということである (傍点原文、大城 1970=1992 : 56)

5. おわりに

本稿は文学 (的事象) をそれに外在する社会的文脈に結びつけることで理解する、という文学社会学の一般的スタイルを取っていない。その代わりに、大城立裕の「作家」としての立場に即し、この作家の前に広がっていた「可能態の空間」(文学場の構造) の再構成を試み、それとの関係で呼び込まれたものとして作家の掲げる文学理念を把握しようとした。芥川賞受賞を契機に、2つの文学場の間で大城の文学的立場が「ねじれ」を孕んでしまい、この矛盾を解消する戦略が要求され、これに応じるものとして 70 年代以降の作家の文学的立場決定を考えることができるのではないかというのが、本稿が示した見方である。

とはいえ、こうした作業は必ずしも文学場の規定力のみを絶対化するためのものではない。A・ヴィアラは、「文学場の社会学は、(中略) 作者の社会的出自と作品の意味を直接結びつけようとする実証主義や、作品と社会との同質性を仮構し、プリズムとその屈折作用の特殊性を軽視するさまざまな『反映理論』を斥ける。テキストが文学であるとみなされたりみなされなかったりする際にはたらくプロセス全体の中に、テキストをあらためて位置づけることが問題なのである」(Viala 1985=2005 : 13) と述べている。「文学場の社会学」の意義は、「文学」と「社会」のあいだを単純に直結させる (反映関係として捉える) のではなく、文学の場が形作る媒介作用 (プリズムの屈折作用) を考慮に入れるところにある、ということである。とすれば本稿は、鹿野政直が指摘するような状況に対峙する沖縄の知識人としての大城の課題 (沖縄文化の独自性保持) が、文学生産の理念へと結びついていく際に、そこで作用していた媒介要因をより精緻に捉え、重層的に記述していく試みとして位置づけうるだろう。

【注】

- 1) 本稿は第 81 回日本社会学会大会 (2008 年 11 月 23 日、東北大学) における同題報告に大幅な修正・加筆を行ったものである。大城立裕の文学理念を検討する本稿の対をなすものとして、その文学言語 (文

体) 論を検討した松下 (2010) がある。

- 2) この課題は、個別の作家論にとどまらない射程をもつ。大城は「琉球新報短編小説賞」(琉球新報社主催、1973年創設)「新沖縄文学賞」(沖縄タイムス社主催、1975年創設)など地域的な文学賞の設立当初からの選考委員として戦後沖縄文学の制度的機構を駆動する位置にあり、その文学像は「沖縄文学」を冠した文学賞の選考評に反映される(武山 2003)。この作家がいかなる文脈において、いかなる文学観を採用したのかという問題は70年代以降の沖縄の文学空間の問題へと接合される。
- 3) 「亀甲墓—実験方言をもつある風土記」は、沖縄戦下の農村を舞台に、戦禍を逃れ祖先が祀られる亀甲墓に籠った一家の顛末をユーモラスに描いた短編小説である(初出は1966年『新沖縄文学』第2号)。
- 4) 「亀甲墓」に対する評は「沖縄文学の可能性」(『沖縄タイムス』1967年10月5日)、「期待したい文化の予言者」(『土とふるさと文学全集』月報10号、家の光協会、1976年8月)などにみられ、「神話」概念については「文学における『神話』の意味」(『新沖縄文学』(第8号、1968年)に詳しい。本稿での引用はそれらが収録された米須(1991)による。
- 5) 具体的には沖縄文化の独自性をもって「日本文化に貢献する」という主張である。その背景には「日本文化に影響を及ぼす」ことが、沖縄の主体性を確立・保持に結びつくという大城の見解がある(大野 2002)。いうまでもなく、こうした議論の背景には日本への一方向的な「同化」として進行した沖縄近代史、その過程で「沖縄人」の主体性が喪失されてきたという歴史認識がある。
- 6) 『神話』の探求へとむかった大城は『内なる沖縄』(1972)において、『共同体』と『やさしさ』を、沖縄の二大文化的特性としてつかみだしてくる(鹿野 1987:446)。そして80年代には『神女』(1984)、『天女死すとも』(1987)といった共同体の伝統的祭祀を司る女性を主人公とする小説を発表していくことになる。こうした展開について我部は、大城と米須に共有される「男性中心主義的な言説」の問題性に注意を促し、「米須と大城が神話・おばあさん・女性文化を語る」ことが「戦後沖縄を覆う性暴力」に対する隠蔽効果を持ったと論じている(我部 2004:107)。なお70年代・80年代にかけての大城作品における沖縄の現在にかかわる政治・状況主題からの後退／文化・民俗的テーマの前景化、その政治性については、大城文学を論じるその他の評論でも指摘されている(井口 1991、岡本 2004、本浜 2004)。
- 7) ブルデューの文学場論の射程とその限界については、鈴木(1996)参照。戦後沖縄文学を、文学雑誌や文学賞といった文学場を構成する審級に着目して把握する試みとしてはすでに、加藤宏(2004、2006)や武山梅乗(2003、2004)がある。本稿は、これらの研究を補完する位置にある。武山(2004)はH・ベッカーのアートワールド論を援用しつつ戦後沖縄文学におけるコンヴェンション(つまり、準拠すべき文学的伝統)の不在を指摘し、そこに大城の度重なる自作語り(「亀甲墓」への言及を含む)の条件を求めている。本稿は、これとは別様の条件の析出を試みるものである。
- 8) この論争を構成する論の数々は、『沖縄文学全集 第17巻』(国書刊行会 1992)に収録されており、本稿もこれに依拠している。
- 9) 大城は1968年から1972年の復帰までの間に200本以上もの小説・エッセイ等を発表した(鹿野 1987:375)。

【文献】

- Bourdieu, P., 1992, *Les Règles de l'art: Genèse et structure du champ littéraire*, Paris: Seuil. (=1995, 石井洋二郎訳『芸術の規則 I』藤原書店.)
- 我部聖, 2004, 「大城立裕をめぐる批評言説のポリテクス—米須興文の言説を中心に」『琉球アジア社会文化研究』7: 96-113.
- 加藤宏, 2004, 「<沖縄文学>場の研究」『明治学院大学社会学部付属研究所年報』34: 153-167.
- , 2006, 「沖縄文学の誕生—制度論的アプローチから戦後沖縄の文学史を構造化する試み」沖縄文学研究会『現代沖縄文学の制度的重層性と本土関係の中での沖縄性に関する研究』平成 15-17 年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 井口時男, 1991, 「葛藤する言語—戦後沖縄文学瞥見」『現代詩手帳』10月号: 41-47.
- 鹿野政直, 1987, 『戦後沖縄の思想像』朝日新聞社.
- 米須興文, 1991, 『ピロメラのうた—情報化時代における沖縄のアイデンティティ』沖縄タイムス社.
- 松下優一, 2010, 「『沖縄方言』を書くことをめぐる政治学—作家・大城立裕の文体論とその社会的文脈」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』70: 55-72.
- 松島浄・加藤宏・鈴木智之・武山梅乗, 2000, 「<沖縄文学>試論—沖縄近代文学の展開と現代」『明治学院大学社会学部付属研究所年報』30: 51-64.
- 本浜秀彦, 2000, 「沖縄というモチーフ、『オキナワ文学』のテキスト—『カクテル・パーティー』と大城立裕のポジショニング」『沖縄文芸年鑑』沖縄タイムス社: 190-207.
- , 2004, 「可視/不可視の暴力と身体のパリテクス—大城作品における『アメリカ』『基地』表象」黒古一夫(編)『大城立裕文学アルバム』勉誠出版: 45-51.
- 波平恒男, 2001, 「大城立裕の文学にみる沖縄人の戦後」『現代思想』29(9): 124-153.
- 岡本恵徳, 1981, 『現代沖縄の文学と思想』沖縄タイムス社.
- , 2004, 「占領下の沖縄と大城文学」黒古一夫(編)『大城立裕文学アルバム』勉誠出版: 31-35.
- 沖縄文学フォーラム実行委員会, 1997, 『沖縄文学フォーラム 沖縄・土着から普遍へ—多文化主義時代の表現の可能性』
- 大野隆之, 2002, 「大城立裕の思想」『大城立裕文学全集 第13巻』勉誠出版: 519-529.
- 大城立裕, 1966, 「戦争が契機に」『新沖縄文学』3: 162-163.
- , 1970, 「沖縄で日本人になること」谷川健一編『叢書わが沖縄第1巻』木耳社(=1992, 『沖縄文学全集第18巻』国書刊行会)
- , 1972, 『内なる沖縄—その心と文化』読売新聞社.
- , 1975, 「通俗状況論のなかで」『文學界』12月号(=2002, 『大城立裕全集第13巻』勉誠出版)
- , 1982, 「受賞のことば」『芥川賞全集第7巻』文藝春秋: 427.
- , 1984, 「沖縄的状况と沖縄的表現(下)」『沖縄タイムス』1984年9月20日13面.
- , 1990, 「神話・日常・状況」『文學界』1990年8月号: 12-13.
- 大城立裕・大江健三郎, 1967, 「〈対談〉文学と政治」『文學界』1967年10月号: 144-155.

- 鈴木智之, 1996, 「作品の科学はいかにして可能となるか—P. ブルデューにおける「文化的生産の場」の理論をめぐって—」『社会学評論』47 (2) : 171-185.
- 武山梅乗, 2003, 「戦後における〈沖縄文学〉の基準—自律と従属の狭間で—」『明治学院大学社会学部付属研究所年報』33 : 39-51.
- , 2004, 「主体性をめぐる闘い—戦後〈沖縄文学〉におけるコンヴェンションの『不在』と代替としての自己準拠—」『駒澤社会学研究』36 : 35-68.
- Viala, A., 1985, *Naissance de l'écrivain: Sociologie de la littérature à l'âge classique*, Paris: Minuit (= 2005, 塩川徹也監訳『作家の誕生』藤原書店.)

(まつした ゆういち 慶應義塾大学大学院社会学研究科)